

VII 総括

1. 新潟県内の砂丘遺跡

新潟県下には日本海沿いに、高田平野・柏崎平野・新潟平野などの海岸平野が発達している。これらの平野は内湾をもたずに直線状の海岸線をなし、いずれも砂丘の発達が見られる。それは、高田平野北部の鴻町砂丘、米山海岸から柏崎平野北西部の荒浜砂丘、角田山麓から瀬波までの新潟砂丘である。それぞれの砂丘の背後には沖積平野があり、小段丘を伴って存在している。新潟砂丘は沖積世に形成された新砂丘のみからなる砂丘で、海岸線に平行にび、列状をなし、もっとも多い所で10列からなっている。これらの砂丘列は、砂丘表面に形成された腐植層と砂丘層の風化の程度から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに区分されている（新潟古砂丘グループ 1974）。鴻町砂丘および荒浜砂丘は洪積世に形成された古砂丘と沖積世に形成された新砂丘が複合する砂丘で、新潟砂丘のように列状は呈していない。古砂丘は共通した特徴から鴻町砂層、番神砂層と命名され、鴻町砂層の黒色腐植土は 6200 ± 110 Y.B.P という数値が得られている（新潟古砂丘グループ 1972）。

新潟砂丘における遺跡のあり方についてはすでに発表されている（岡本 1972、新潟古砂丘グループ 1974）ので、ここでは鴻町砂丘における遺跡のあり方について記述することにする。鴻町砂丘における考古学的記録はⅡ—3で述べたものの他に、古くは江戸時代まで遡ることができるが、採集した遺物の紹介が主で、砂丘と遺物の関係について着眼されたのは昭和に入ってからであった。後藤守一は「石器又は土器等を発見する諸地点について見るに、其の殆んどすべては表面1m内外の砂に覆われ、其の下に20m内外の黒土、1m内外の赤土、同じく1m内外のいく地という順に層をなしているが、其の下は厚い砂層をなしている。」とし、遺跡は砂嘴の上に営まれたものと考えられている（後藤 1930）。さらに後藤は砂丘遺跡を5つのタイプに分けている（後藤 1942）。それによると（1）集落跡が砂丘の進展につれて埋没されて、その一部、被砂の害の未だ及ばざる地域に於て遺物の散布を見る（浜坂型式）、（2）既砂丘の上に集落の営まれしもの（函石型式）、（3）砂丘の活動時代にその一部に集落の営まれしもの（行塚型式）、（4）浜坂型式の遺跡の中、砂層下に没し去ったものが、再度の砂丘活動によつて露呈するに至りもの（浜詰型式）、（5）砂丘とは直接関係なく砂丘の発達によって生じた潟を生活要素として存地せしもの（越後金塚型式）である。

鴻町砂丘上の遺跡を平面的分布から見てみると遺跡が集中しているのは鴻町周辺である。鴻町周辺は砂丘（新期砂丘砂層）の標高も高く、かつその幅も広い。反面、砂丘（新期砂丘砂層）が相対的に低く、かつ幅の狭い上下浜駅から柿崎川河口までと土底浜駅から直江津にかけては遺

跡の数は極端に減少している。日本道路公団のボーリング資料等によれば、古砂丘の北東から南西方向の高低は、鴻町付近で一番標高が高く、上下浜駅付近及び土底浜駅付近から順次高度を下げて行く傾向がある、柿崎川右岸の市街地及び関川左岸の五智地内で再び高くなり、新期砂丘のあり方と極めて近似している。鴻町周辺の遺跡の分布を詳細に見ると鴻湖と鴻湖にはさまれた台地状地形の所や鴻湖にのびる半島状地形の所にあって、いずれも鴻町砂層（古砂丘）上に営まれている。遺跡は北西方向から南東方向に並び、現海岸線とは約90度ずれている。おそらく、現地形で標高の高い所の下部に古砂丘が存在しているといえよう。よって、現在遺跡が発見されていない新期砂丘下にも遺跡存在する可能性が多分にあるものと思われ、鴻町砂層（古砂丘）のあり方と有機的関連を持っている。

遺跡の立地は個々の遺跡の地理的環境に左右されることは言をまたないが、鴻町砂丘内に存在する遺跡のあり方は、新鴻砂丘内における遺跡のあり方とは異なっている。発掘調査が実施された遺跡の層序から時代および性格を考えてみると。(A)上越市の善光寺浜遺跡では古砂丘の上に褐色粘土が0.5から1mあり、その上に黒色腐植砂（繩文前期末の遺物包含層）が1m内外、そして新期砂丘砂層が5から6m堆積し、新期砂丘砂層下面から古瀬戸などの骨蔵器が検出されている。(B)吉川町長峰遺跡では古砂丘の上に褐色粘土があり、その上に黒褐色土、黒色土となり、黒褐色土および黒色土から繩文中期前葉および後期の土器や石器の他に古墳時代前期の住居跡が検出されている。(C)柿崎町の大久保遺跡、木崎城跡では新砂丘砂の間に黒褐色砂がある、前者からは古墳時代後期（鬼高式併行期）の住居跡や土器類が、後者からは奈良時代末期から平安時代にかけての集落跡が検出されている。また、大潟町の小船津浜遺跡では、現在波によって侵蝕されているが、崖面に製塙土器の堆積層が見られる。少なくとも鴻町砂丘における遺跡のあり方は、層位から古砂丘の上に新期砂丘砂がおおいかぶさったもの、古砂丘の上に営まれ、新期砂丘砂を伴わないもの、新期砂丘砂内にあるものの3種に別くことができる。さらに地質学的な面（砂丘そのものの成因、変遷過程など）についてはあまり知識がないために遺跡形成当時の環境復元は十分にできないが、現地形上からさらに分類されるものと思われる。(1)現海岸線に近接して古砂丘とその上面および背面部に厚くおおいかぶさるように形成された新期砂丘砂からなり、古砂丘上面を被覆する黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、前面に海、背面に沖積地を臨むもの〔鍋屋町（繩前）〕、(2)沖積地を臨む古砂丘上にあって、舌状にのびる台地上やその緩斜面ないしは小規模な馬背状地形を呈し、黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、新期砂丘砂を伴わないもの〔長峰（繩中・後、古墳）、蛇池・長崎（繩後）、屋敷割（繩前・後）、巻（繩中～後）など〕、(3)古砂丘内陸側の緩斜面から裾部にあって、黒褐色ないしは黒色腐植土に遺物が含まれ、新期砂丘砂を伴わないもの〔内雁子神社裏（平）、朝日池々底（繩中・後）〕、(4)新期砂丘砂内の黒褐色砂バンドに遺物が含まれ、新期砂丘の背面緩斜面上にあるもの〔出羽・九子浜（古墳～平）〕、(5)独立丘状の新期砂丘状の新期砂丘砂内の黒褐色砂バンド

に遺物が含まれるもの〔柿崎城跡(平・中世)〕、(6)沖積地を臨む新期砂丘砂の緩斜面にあって、黒褐色砂バンドに遺物が含まれるもの〔大久保(古墳)〕、(7)現海岸線に近接し、新期砂丘砂内の黒褐色バンドに遺物を含み、前面に海岸を臨むもの〔下小船津浜(中世)、遊子寺浜(平)〕などに分類される。このように砂丘遺跡と呼ばれている遺跡は一様ではなく、個々の遺跡がそれぞれの性格を有しているといえる。

砂丘遺跡の研究は、遺跡形成時の自然環境を復元することに主眼をおかなければならぬが、考古学的追求からのみでは解決できないことが多い。このため理科学的方法(泥炭層のC¹⁴測定、花粉分析など)を駆使する地質学的な面から協力を得なければならない。考古学的には各砂丘ごとの遺跡分布調査を行うとともに、遺跡の年代判定、遺物の包含状況の把握などを十分に行なって、そのデーターを提供しなければならないであろう。今後の砂丘遺跡の研究のみならず沖積地の遺跡の研究には地質学的分野と考古学的分野の協力は必要欠くべからざるものであり、協力することによって、個々の遺跡の性格などが一層明らかにされるであろう。

2. 遺構・遺物について

遺構 検出された遺構は掘り込み状遺構、ピット、溝、火葬骨埋納穴で、遺構確認面および内部充満土から最底2種に大別される。新期砂丘砂上から掘り込まれ、内部に新期砂丘砂が詰まっていたものは掘り込み状遺構、1号溝、ピット(2~4)で、同一時期に埋没ないしは埋めたものと思われ、中世から近世の範囲には入るものであろう。2号溝・ピット(1・5~48)は繩文から古代の範囲には入るものであろう。蜘蛛池の集落はかつて本遺跡の南側にある神社を中心として南北に営まれていたといわれている。また、瑞天寺は大同3年、弘法大師によって開基されたといわれ、文明年間に焼失し、寛永10年に乗国寺第2世在庵宗朔禪師によって再度開山され、現在に至っているといわれている(越後頸城郡誌稿刊行会 1969)。本遺跡出土の遺物の一部はこれらの歴史的事実や伝承と有機的関係を有するものかとも思われるが、今後の調査・研究に期待したい。

遺物 今回の調査で検出された遺物は繩文時代、歴史時代のものである。繩文時代の土器は前期後葉から晩期中葉に至る各時期のものがみとめられる。前期後葉では諸磯C式、鍋屋町式が出土し、柿崎町鍋屋町遺跡と同じ傾向が感じられる。中期の土器は非常に少なく、新崎、上山田式の胴部片、大木9式の胴部片が目立つ程度で、文様のはっきりしたものはほとんどない。中期末から後期初頭にかけては、この時期に多い刺突を充填する壺形土器と平縁に沿って沈線を引く砲弾形の深鉢土器片があり、後期前半では関東地方の堀之内I式系のものが出土している。後期後半になると加曾利B式系、東北地方の新地式系、東海・中信地方に分布する中ノ沢式など各地のものがはいっている。晩期は粗雑な感じのする大洞B~C₂式併行の土器がある。石器は砥石を除いていずれも繩文時代のものと考えられるが、時期別にはとらえられな